

伊勢半本店・紅ミュージアム

(東京・港区)



<赤と紅>

古来、最も親しまれた色が<赤>ではないでしょうか。洋の東西を問わず、赤は古代の壁画をはじめとする装飾品に広く使われてきました。

まずは、赤という色が、どのような材料を使って使われてきたのかを調べてみました。天然素材からいかに赤を抽出して使ってきたのか。顔料としては、鮮やかな朱色を示す辰砂があります。硫化水銀を原料とするものです。また、弁柄の赤（酸化鉄）もよく知られた赤色顔料です。

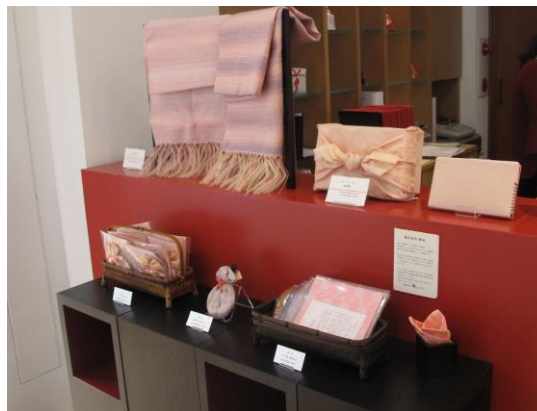
一方、染料としては、植物由来の天然染料が用いられてきました。赤の染料として代表的なものとしては、ベニバナ（紅花）、スオウ、アカネ（茜）があります。現在、天然染料による糸、織物の染色は、ごく一部で行われているだけになりましたが、植物由来の染料には、合成染料にはない独特の魅力があり、あらためて注目されるようになってきました。

<紅花と紅>

なかでも紅花を原料とする紅は、最も親しまれ、よく使われた赤色色素です。紅花の原産地は中近東・エジプトといわれ、シルクロードを通して中国に伝来し、日本には3世紀中頃に半島を経て伝わったと考えられています。



紅花



現代の紅花染

紅花は江戸時代には盛んに生産されました。なかでも山形県最上地方が最も有名な産地です。この地方で生産された紅は、最上川を下って、酒田港から、北前船で京阪地方に運ばれました。

紅花は黄色の花です。花を摘んですぐに水にさらして乾燥させることを何度も繰り返すと紅色になります。紅花の花の色素は水に溶けやすい黄色の色素サフロールイエロー99%と水に溶けにくい紅色の色

素カルタミン1%が混在しており、水にさらすことによって分離させることができます。わずかの赤の色素を得るのは大変なことだったのです。

紅について知りたいと思い、訪ねたのが東京・青山にある伊勢半本店・紅ギャラリーです。

伊勢半本店は、化粧品としての紅を扱う「紅屋」として江戸時代、日本橋小舟町で創業、現在まで当時と変わらぬ製法で紅を作り続けています。ミュージアムは、紅の歴史や文化を知ることのできる資料室と、紅に実際に触れることのできるサロンで構成されています。

資料室には、紅の起源、製造、産業としての展開に関する資料、江戸時代の化粧の様子を描いた浮世絵などが展示されています。なかでも、驚くのは江戸後期から末期にかけての化粧道具の展示です。蒔絵の箱に綺麗におさめられた、紅・白粉・刷毛、筆などの道具を見ていると、時代を問わず、化粧というものにかけた情熱をうかがうことができます。

精製された紅は、玉虫色をしています。水溶性ですから、筆に水を含ませて溶くと鮮やかな紅色が現われます。サロンでは、実際にこの様子を体験することができます。化粧に用いる場合、唇に一筆させば薄い桜色に、重ねてさせば鮮やかな赤に、さらに重ね塗りをすると、玉虫色になります。この玉虫色が江戸時代には大いにもてはやされたこともあるといいます。実際に浮世絵にその様子が描かれています。

この重ねの手法は、化粧だけでなく、染にも使われています。一度の染では薄い色しか出ませんが、何度も染を繰り返すことで鮮やかな赤が現われるわけです。

紅ミュージアムの展示を見ていると、日本人が紅とどのように接してきたのか、あらためて思いを巡らしてみたくくなりました。

(八代 啓一)



玉虫色に輝いた紅から、水で濡らした筆で紅を得る



江戸後期の化粧箱 定家文庫・江戸後期鏡の裏面には「寿」の文字が鑄られており、婚礼の祝い品として詠(あつら)えられたと思われる。

伊勢半本店 紅ミュージアム

〒107-0062 東京都港区南青山 6-6-20 K's 南青山ビル 1F

TEL03-5467-3735

ホームページ <http://www.isehanhonten.co.jp/>

アクセス

■東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線

「表参道」駅下車 B1 出口より徒歩 12 分